

◆もし「平成狸合戦ぽんぽこ」の狸がドラッカーのマネジメントを読んだら

★

シブリの作品はどれも好き。「風の谷のナウシカ」がやっぱり一番の傑作だと思うが、一番好きなのは「平成狸合戦ぽんぽこ」。明るくちょっと御下品で、真に結構な仕上がり。無邪気に「狸のキンタマは八畳敷き」とか「たんたんタヌキのキンタマは一風に揺られてプーラブラ♪」とか狸に言わせているのが実にいい。久々にDVDを観て感動した。シブリ、ナイス！

★★

このアニメは、落語好きにはまたたまらない。語りは古今亭志ん朝。鶴亀和尚狸の声は柳家小さん。上方落語界からは、桂米朝が四国徳島の六代目金長狸、桂文枝が屋島の太三郎禿狸の声を務め、味わい深い。いろんな宗派の念仏・唱題が出てくるのも落語的。例えば、おろく婆狸が「赤勝て青勝て皆死ぬ、負けた狸をぶっ殺せー」と唱えながら団扇太鼓をトンツクトンツク叩いて出てくるのは法華。真言宗の「おんあぼきゃべいろしゃのう・・・」も出てくるし、志ん朝の語り口調は浄土真宗のお説教の趣がある。最後の方で狸が機動隊にぶつかっていくときには「アーメン」まで出てくる。落語の方では、心中など人が死ぬ場面では「南無阿弥陀仏」と唱えることに相場が決まっている。でも、このアニメでは「アーメン」だった。これは、さすがにそうせざるを得なかったのだろう。「南無阿弥陀仏」では生々しすぎるし、演出が臭くなる。そもそもこのアニメ、事故で人が死んだり、狸の大量殺戮があったり、田中角栄さんとか思えない開発業者が出てきたり、結構エグイ。“平成”狸合戦なのに、“昭和”40年代の多摩ニュータウンなんて、時期も地名もリアルに語られる。でも、これを「あるときあるところで」にしてしまうと、かえって刺々しい批判になってしまう。狸がキンタマ袋をグイグイ引っ張る場面が無駄に多いくらいでないと、この映画は成り立たない。

★★★

ところで、物語の中盤で妖怪大作戦に失敗した時、狸たちが「もしドラ」していたら、この話はどうなるか？

コア・コンピタンスを生かした顧客への貢献という観点から、狸たちは、「化ける」「サービス精神旺盛」という自らの強みを生かし、自分たちは化けられるんだと公表し、人間を喜ばせる仕事に就くことも選択できた。もしそうしていれば、言葉ばかりで実のない「狸と共生できる開発」なんてことでせこい緑地が残るのではなく、広大な狸の森にとときどき人間が癒されに行くような自然公園ができたかもしれない。

SWOT分析にあてはめると、「人間が、恐れや崇りを感じなくなった時代」という脅威に対し、「化ける」という強みを生かして、自らの仕事のイノベーションができたかもしれない。四国の三長老狸の時代遅れの神通力を頼みにした時点で狸の負けは決まっていた。本当は、佐渡の二つ岩団三郎狸という伝説の狸がそろって盤石のはずだったが、団三郎狸はすでに猟師の手にかかっていたというのも象徴的だ。四天王の一角が欠けたのでは、仏法を守ることはかなわない。さらに、変化（へんげ）できない並みの狸の処遇をどうするかという現実問題も提起している点で、企業も市民活動団体も、「平成狸合戦ぽんぽこ」に学ぶこと多とすべし（笑）。

★★★★

鶴亀和尚狸のキンタマの緋毛織の上で狸が会議する場面で、和尚狸が「これはなにじゃ、愚僧のキンタマじゃ」と言うところ。あれは、どう考えても不必要な場面だけど、たまらなく好き。シブリも、ただただ言ってみただけでしょう。だから、シブリ、ナイス！